



国内事業

2020年度の国内事業も、新型コロナウイルス感染症の拡大に左右された1年でした。海を超えた国際交流はできず、対面型交流や居場所づくりも軒並み中止。オンラインを使った交流に切り替えられました。しかし、こういう時期だからこそ、人のつながりの大切さを再認識した1年でした。

会の活動の原点である国際交流事業ですが、日中韓の大学生がSDGs（持続可能な開発目標）を学ぶ「SDGs Academy SAGA」も、2度の延期を経て、初めてオンライン交流に。ウェブ会議アプリZoomを使って、日中韓の課題解決に向け、2030年までのアクションプラン（行動計画）をつくりました。討論やオンライン飲み会など楽しんだ半面、日中韓の学生が「いつかは直接会おうね」と約束しあう姿が印象的でした。

本来は、学校でも家庭でもない第三の居場所として、子どもたちが集い、食事等を通して地域の人々と語り、触れ合い、自分らしくいられるような居場所を提供する「子どもの居場所づくり事業」。これらの「密」になることが許されない社会情勢の中、感染対策に注意し、6回の中止がありながら計27回は開催にこぎつけました。開催に向けて努力してくださった地域の方々には感謝します。

タイ農村部の学生が日本に留学し、日本語と介護を学ぶ「志学生プロジェクト」も、2020年春に来日予定だった2期生は、入国延期が続き、家庭の事情もあり、泣く泣く辞退となりました。一方で、1期生のYuさんは2年間の日本語学校を無事に卒業。2021年度からは西九州短期大学への進学が決まりました。

一方で明るい話題も。中小企業向けのSDGs経営支援プログラムでは、計5社の企業行動憲章、アクションプランの作成を支援しました。事業や働き方の見直しにつながったのみならず、メディアで取り上げられた企業もあり、労働意欲やブランドイメージの向上にもつながりました。

また、設立を支援してきたタイ人グループ「サワディー佐賀」が総務省ふるさとづくり大賞団体表彰を受賞したことも明るいニュースでした。グループ化を進めることで、孤立を防ぎ、災害情報の母語発信につながるということで、当会はサワディー佐賀をモデルに、ミャンマーとスリランカのグループ設立支援も動き始めました。

コロナ禍で再認識した
人のつながりの大切さ

日中韓大学生交流「SDGs Academy SAGA」

オンラインを活用してのべ32人が交流

時期：2020年10月30日～2021年2月27日



SDGs アクションプランを作った日中韓の大学生たち

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面型交流のSDGs Academy SAGA は中止したものの、初めてのオンラインで交流しました。日中韓のチームで、2030年までのSDGs アクションプランを作成しました。環境やジェンダーなどの課題について、三国の多角的視点が印象的でした。夜も懇親会をするなどして、十分にオンラインで国際交流ができることが実感できた半面、「早く対面型の交流がしたい」という声も多く上がりました。 (活用：ふるさと納税)



佐賀のタイ人と交流する1期生のYuさん (右から3人目)

タイ介護留学事業「志学生プロジェクト」

第1期生が短大に進学決定

時期：2019年4月～現在

タイ農村部の学生が日本語と介護の技術を学ぶ「志学生プロジェクト」にも、コロナ禍が影を落としました。2020年春に来日予定の2期生1人は、留学が延期に。同年10月に渡航制限が緩和となったため受け入れ準備を進めましたが、タイも長引くロックダウンで経済が疲弊し、家計の中心だった彼女は辞退となりました。

一方で1期生は日本語学校を卒業し、介護福祉士を目指す短期大学へ進学。3期生も1人が来日予定です。 (活用：ふるさと納税)



ふるさとづくり大賞は山口祥義 佐賀県知事 (右から2人目) へも報告した

外国人活躍支援事業

タイグループがふるさとづくり大賞

時期：2018年1月～現在

佐賀県内に住むタイ人同士の横の連携をつくろうと、2018年1月に設立したサワディー佐賀。タイ料理教室やタイ語教室などに加え、2019年8月の佐賀豪雨を契機に、タイ語の災害情報発信などに取り組んできました。活動が認められ、令和2年度総務省ふるさとづくり大賞(団体表彰)を受賞しました。現在、ミャンマー語とスリランカのシンハラ語でも災害情報発信をするため、両国のグループづくりにも取り組んでいます。 (助成元・佐賀未来創造基金休眠預金)



夢の学校でのリベラルアーツ

講師派遣 (リベラルアーツ)

SDGs マスター 3人を認定

時期：2020年4月～2021年3月

「小さな地球市民」としての視野を養う、放課後スクール「夢の学校」の児童向けのリベラルアーツ(教養教育)は、1年を通じて「SDGs(持続可能な開発目標)」をテーマに実施しました。子どもたちは、架空の「ユメガク国」の家計収入について考えるワークや、すごろく、寄付に関する授業などを受講。最終回にはSDGsクイズを実施し、優秀者3人を「SDGsマスター」に認定しました。賞状をもらった児童はとて誇らしげで、勉強意欲の向上にもなりました。



SDGs 導入支援事業

SDGs 行動憲章作成した導入した企業 5社

時期：2020年4月～現在



経営陣以外で企業の方向性を決めていきます



SDGs を自社の理念や活動に導入したい企業様を対象に支援を行いました。2030年までにSDGsを達成するために企業の取り組みは必須となります。企業側も経営のことや環境により配慮した組織づくりを目指し、社員中心で作成などを行いました。業種はハウスメーカーやリサイクル業など多岐に渡っており、最後は経営者にプレゼンするというので、導入だけでなく、組織内のチームビルディングにも活かすことができました。

SDGs 推進事業

学校向けのSDGsセミナーを13校1,000人を超える学生および先生へ提供しました

時期：2020年4月～現在



永原学園様と協定を締結しました



SDGs 推進に向け、これまで協定を結んでいた龍谷学園様だけでなく、県内の小中高生へSDGsの授業、講演などを行いました。教科書にもSDGsを導入してきており、学校現場でも持続可能な社会の担い手育成が求められています。2020年度新たに協定を結んだ永原学園様(西九州大学短期大学部)へは2021年度から授業展開を行っていき、今後、佐賀、日本の問題解決を担っていく人材育成を行っていきます。

災害支援事業

令和2年度佐賀豪雨の支援活動を行いました

時期：2020年7月～9月



多くの団体と連携して災害支援



昨今の地球温暖化が加速し、毎年のように災害が県内各地で発災しています。その中で、2019年に県内のCSO、52団体が中心となり結成した佐賀災害支援プラットフォームとして災害支援を行いました。昨年度は鹿島や太良が特に被害が大きかったため、物資やボランティア派遣などのコーディネートを行い、コロナで県外から支援を受けにくい中、県内の人材で支えることができました。

子どもの居場所づくり事業

新規居場所の立ち上げコーディネート 2団体

時期：2020年4月～現在



佐賀市から委託を受け、当会がコーディネーターとして子どもの居場所づくりに取り組むのも、今年度で4年目を迎えました。市との連携により、循誘地区の既存居場所団体の運営面のフォローだけでなく、新規で居場所の立ち上げを希望する2団体のコーディネートも行いました。また、県の関係団体と連携した居場所マッチング交流会や、その他交流イベント等にて、支援者と居場所運営者をつなぐ活動を実施しました。



海外事業

2020年度は、ミャンマーでも新型コロナウイルス感染症拡大が深刻な問題となりました。それに伴い、研修実施や事業地訪問の制限、建設事業実施時の資材到着遅延、作業員確保の困難等々、今まで経験したことのなかった問題に直面しました。しかし、思うように事業が進まない中、現地スタッフや建設会社の方々や代替案を考え、工夫して乗り越えました。その結果、一部の研修実施に遅れは出たものの、大きな建設事業も滞りなく終わることができました。一方、ミャンマー事業としてこれまで一生懸命取り組んできたソーシャルビジネスが、コーヒー分野で一步大きく前進しました。数年前から進めていた生産に加え、加工実践、販路の確立に向けて動き出しました。

また、新しい企画や取り組みに多くのご支援もいただきました。クラウドファンディングでのチン州学校建設資金、コーヒーアンバサダーとしてのコーヒー産地ご支援をはじめ、様々な形でのご支援、本当にありがとうございました。責任を持って、大切に使用させていただきます。

最後に、現地スタッフの頑張りも特筆すべきことでした。コロナにもクーデターにも負けず「地域住民のために」という想いを胸に、心を一つにして事業を実施していこうとする現地スタッフの姿に、当会の「地球市民としての自覚をもち、地球的課題に取り組み、世界、そしてわが地域をよくしていこう」という想いが重なり、とても頼もしく、共に活動ができる喜びを感じました。

今後事業を進めていく中で、予期せぬ事態が起こることも多々あると思います。しかし、支援者の皆さんの温かい応援をいただきながら、信頼できる仲間たちと共に私たちにできることを全力で進めていきたいと思っています。(柴田)

奨学金事業についても、ミャンマー・スリランカともに Covid-19 対策としての学校の閉鎖が続き、奨学金事業の役割を果たすことが難しい年となりました。2年に一度のスリランカ奨学生の日本招聘も実施できませんでした。また、ミャンマーは依然難しい状況が続いており、こどもたちは1年間学校に通えず、再開の見通しさえつきません。コロナの世界的感染拡大を受け、開発途上国ではこどもの貧困が15%増加するとの予測もあります。こどもたちの教育や福祉が置き去りにならないよう、ご支援いただいている皆さまとともに今後も教育支援に尽力していきたいと心から願っています。(藤瀬)

大変な時だからこそ
「大切な絆」を信じて



支援した子どもの人数：ミャンマー 74 名、スリランカ 40 名
 ご支援いただいたさとおや様（支援者）の人数：151 名

時期：2020 年 4 月～ 2021 年 3 月

2020 年度は世界的に新型コロナウイルス感染症拡大が猛威を振るい、ミャンマー、スリランカともに学校が正常に開校されない状況が長く続き、思うように事業を進めることができませんでした。

スリランカでは学校の閉鎖と再開が繰り返され、1 月中旬ようやく再開し、奨学生 10 名も無事に決まりました。しかし決して学校の開校状況も順調とは言えず、新学期開始、大学入学試験や中学校卒業試験も通常より遅れての実施となっています。

ミャンマーでも新型コロナウイルスの影響ですべて閉校が続いていた中、2 月に起きた政治的混乱により、学校再開の目途も立たないまま現在に至っています。さとおやの皆様から 2020 年度にいただいたミャンマーの奨学金については、「教育のためのご支援なのだから、やはり現地へは学校に通ってもらうために奨学金を支給する」との方針を固め、現在は当会の事務局にて、大切にお預かりしています。

来年度も新型コロナウイルスの影響は続くことが予想されますが、さとおやの皆様の想いを少しでも現地へお届けできるよう、当会でできる形で子どもたちを支援する方法がないかを模索して参ります。

奨学金事業の支援地紹介

ティンテッパラヒタ

【奨学生の人数：20 名】

様々な地域の子どもたちを受け入れ、500 人以上が生活しています。パオ族、カイン族など異なる民族出身の子が一緒に暮らしています。山の上に位置しており冬はとても寒い地域です。



シショダヤ女子校

【奨学生の人数：40 名】

スリランカ南部州のゴール市にある、小～高校の一環公立女子校。ゴール市に女子学生が英語で教育を受ける学校がなかった時代に、南部州で初めての女子高として設立されました。

タンボジセンター

【奨学生の人数：14 名】

地球市民の会が直接運営している、農業畜産研修センターです。将来農村リーダーを目指す子どもたちが寮で暮らしながら農業や勉強に励んでいます。



マインピンパラヒタ

【奨学生の人数：5 名】

タウンジー事務所から車で約 1 時間半程度のところにある僧院です。数年前まで紛争があった影響で子どもたちの進学率が非常に悪く、学校の数も少ない地域のため、パラヒタは必要な存在です。

(※ 2021 年度より支援開始)



ピンニャーウーインパラヒタ

【奨学生の人数：30 名】

地球市民の会タウンジー事務所から最も近いところにある僧院です。低学年から高校生まで 1,000 人以上の子どもたちが生活しています。

シーサイン寮

【奨学生の人数：5 名】

タウンジー事務所から車で 2 時間半ほどのところにあります。地元の若者が有志で運営している寮で、約 40 人の高校生が生活しながら学校に通っています。

(※ 2020 年度をもって支援終了)



※パラヒタとは、僧侶がお布施などで運営している「子ども寮」です。

担当者コメント



武富有香

(奨学金 / 国内事業担当)

新型コロナウイルス感染症拡大とともに始まった私の地球市民の会での勤務。入職早々、業務に慣れないうちからテレワークになるなど、私自身にとっても波乱万丈な幕開けでした。この一年間で、現地の子どもたちのことを心配してお声がけしてくださるさとおやの皆様と出会ったことに感謝しています。さとおやの皆様との触れ合いを通し、改めて自分自身に「人のしあわせが自分のしあわせ＝地球市民」という意識があることに気づくことができました。現地の子どもたちを、当会を支えていただき本当にありがとうございます。これからも引き続きご支援いただけますと幸いです。



農業堰の取水口の工事の様子



マインピン地域農業堰建設事業（シャン州）

乾季も水にアクセスできる人 250 世帯 1,250 人

時期：2019年1月～現在

マインピン地域は湧き水による水資源が豊富です。しかし水量の管理や農地への配水設備が不十分なため水を貯水することができず、雨が降らない乾季には農業ができません。既存の堰は地域住民たちが手作りした木造の簡易的なものであり、老朽も進んでいるため、十分な堰としての機能を果たしていません。私たちは、豊富な水資源を持続的に管理し、年間を通じて農地に配水ができるよう、堰の建設を行っています。（助成：外務省日本 NGO 連携無償資金協力）



緑化委員会主導で苗の分配をしている様子



マインピン地域水源涵養・アグロフォレストリー普及事業（シャン州）

植林した本数 5,500 本 (12ha)

時期：2020年7月～現在

マインピン地域は、15年ほど前までは深い森に覆われていました。しかし、駐屯する国軍による大規模な乱伐採と木材販売、更に地域外住民による過度な農地開発が行われたため木がなくなってしまいました。本事業では、8村の住民と緑化委員会が協力し、水源周辺及びアグロフォレストリーデモファーム等合計12haに5,500本の植林を実施しました。また、今後育苗施設の整備、緑化活動の啓発研修及びアグロフォレストリー・循環型農業研修を実施していきます。

（助成：公益社団法人国土緑化推進機構）



啓発活動の様子



インレー湖水質浄化啓発活動（シャン州）

植林した数 7,970 本

時期：2020年4月～現在

インレー湖では、近年の人口増や生活様式や農業生産方法の変化が、湖の環境に大きな影響を与えていると言われています。この環境悪化は湖周辺だけの問題ではなく、湖を取り囲む山岳地域で生活する人の生活様式にも深く関わっています。本事業では植林活動のほか、湖上、湖畔、周辺山岳地域でそれぞれができることを考え、啓発活動、植林、ゴミ拾い、ゴミ処理委員会の組織化、少量の薪で使用可能なかまどの配布等多面的な活動を行っています。

（助成：公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団公益社団法人国土緑化推進機構）



ホテイアオイ堆肥を作製している様子



ホテイアオイ堆肥化と土砂流入防止（シャン州）

引き揚げたホテイアオイの量 16 トン

時期：2019年4月～

インレー湖の湖面に繁殖する外来種の水草「ホテイアオイ」。人々の交通手段である通船を妨げ、増殖により湖の生態系を乱しています。私たちはホテイアオイを引き揚げ、地域住民が使用できる堆肥化を進めています。ホテイアオイは窒素が豊富なため作物の生育に有効です。更に改良を加えて付加価値を付け、環境保全型の有機たい肥としての販売を目指しています。堆肥化と併せ、湖への土砂流入を防ぐよう田んぼの整備も行っています。

（助成：公益財団法人日本国際協力財団）



現地 NGO 独立支援 (シャン州)

ミャンマー人スタッフの新事業企画 3件

時期：通年

2003年から事業を進めてきたシャン州では、ミャンマー人ローカルスタッフを中心とした TPA Myanmar (以下、TPAM) というローカル NGO 団体を作りました。TPAM スタッフで地域に必要な事業は何か、自分たちがこれまでの経験を活かしてできる事業は何かを考え、新しい事業を1から考えました。3つの案件を立案し、そのうち1件は2021年度から実施予定です！ これからも地域の力になっていける活動をたくさん考え、実施していきたいと思っています。

(自己資金)



タンボジセンターキッチン屋根修繕 (シャン州)

センターで暮らす子どもと職員 約20人

時期：2020年5月

5月にタンボジ農業畜産研修センターがある地域で強風が吹きました。圃場の作物の実も落ち、強風による倒木がセンターの講義棟に直撃しました。人的被害はありませんでしたが、老朽化していた講義棟の屋根は大きく破損しました。雨季が近づいていたため、いつもタンボジセンターを支援してくださる方のお力を借り、屋根と天井を直しました。子どもたちも安心してセンターでの暮らしと学びを続けることができるようになりました。

(個人寄付)



循環型農業・栄養研修 (チン州)

研修を受講した人 約500人

時期：2018年10月～現在

ライレンピー地域では過度な移動式焼畑農業により、土壌の劣化や収量の減少、人々の栄養状況に問題を抱えていました。ライレンピー持続開発研修センターを拠点に循環型農業の基礎～応用の知識と技術研修を行っています。また女性を対象とした栄養研修では、妊産婦や乳幼児の栄養改善に注力しています。新型コロナウイルス感染拡大により実施が困難な時期もありましたが、募集以上の参加申込みがあるほど、地域住民にとって関心の高い学びとなっています。

(助成：外務省日本 NGO 連携無償資金協力)



遠隔型研修の実施整備事業 (チン州)

オンライン研修にアクセスできる人 約3,000人

時期：2021年1月～3月

チン州でも新型コロナの感染が広がり、移動や集会が厳しく制限されるようになりました。このような状況の中でも農業研修や栄養研修を継続できるよう、オンラインでの研修開催を模索。ライレンピーは通信環境が非常に不安定で、特にセンターは地形的に電波が届きにくい場所にあるため、センターの通信環境整備に取り組みました。アンテナを設置したことで以前と比べて格段に電波が良くなり、今まで不可能だったビデオ通話ができるようになりました。今後、オンライン研修を各地に向けて発信していく予定です。

(助成：公益財団法人かめのり財団)

ライレンピー町飲料水・生活用水環境整備 (チン州)

水環境が改善される人 433 世帯 2,926 人

時期：2020年1月～現在

ライレンピー町では、既存の給水設備の欠陥により慢性的な水不足を抱えています。町への配水は1日2回、1回あたり2時間のみです。女性や子どもが町内の水栓まで水を汲みに来ます。山岳集落のため急傾斜な道が多く、女性の流産も頻繁に発生しているほか、衛生問題も多く、水に起因するお腹の病気が蔓延しています。私たちは水源から各家庭への給水・配水設備を整備し、生活や農業が十分にできる環境づくりに取り組んでいます。

(助成：外務省日本 NGO 連携無償資金協力)



ミンダ町飲料水・生活用水環境整備 (チン州)

水環境が改善される人 12,000 人

時期：2020年1月～現在

ミンダ町は人口1万2,000人ほどのチン州南部にある小さな町です。既存の給水設備に欠陥が多く、生活に必要な水さえ十分に配水されていません。特に夏季は月に1,2回の配水に頼って暮らしているため、衛生状況の悪化により感染症が蔓延し、命を落とす子供が多くいます。給水設備の整備により、日常に必要な水を各家庭で使えるようにし、子供たちを対象とした衛生研修を行い、清潔・健康な生活を送るための啓発活動も行いました。

(助成：外務省日本 NGO 連携無償資金協力)



コーヒー栽培普及・農民組織の基盤強化事業 (チン州)

コーヒー育苗数 約1万本

時期：通年

ライレンピー地域は年間で2万円ほどしか現金収入がありません。これまでは自給自足に近い生活を送ってきましたが、近年の人口増による過度の焼畑、それに伴う森林減少や土地の疲弊が引き起こす減収により、生活が困窮しています。本事業では、当会が運営するライレンピーセンターにて育苗した苗木を用いて栽培を普及し、地域の農民組織による生産されたコーヒーの集荷・出荷システムを構築することで、農民の現金収入増加を目指します。

(寄付、自己資金)



小中高生への環境保全啓発活動 (チン州)

植林した数 800 本

時期：2020年4月～2021年3月

近年の急速な人口増加により、ライレンピーでは森林破壊が進んでいます。問題意識を持っている住民は少なく、学校での環境教育も行われていません。そこで、環境問題への理解を深め、保全活動に取り組むきっかけとなるよう、学校2校の敷地内に小規模な学校林を造成しました。新型コロナウイルスの影響で学校が休校したため、教師と保護者のみで造成を実施しましたが、学校再開後、生徒を対象とした環境保全研修など環境教育を実施していく予定です。

(助成：公益財団法人イオン環境財団)





堆肥づくりの様子



学校農園実践による循環型農業普及事業（チン州）

農園づくりを行う児童・保護者・先生の数 約 300 人

時期：2020 年 4 月～2022 年 3 月

ミンダ 2 校およびライレンピー 1 校、計 3 校の学校内に学校農園を整備し、児童・生徒や保護者、地域の人々に基礎的な循環型農業の知識を習得してもらう事業です。あわせて栄養研修を実施し、農園で育てた野菜を使って調理実習も行います。各校の学校委員会と協議し、農園整備の準備を進めていきましたが、新型コロナウイルスの影響でスケジュールに遅れが生じています。事業期間を 1 年延長し、現地の状況をみながら 2022 年 3 月までに実施する予定です。

(助成：一般社団法人うちよ財団)



栄養研修に参加した女性たち



スピルリナによる栄養改善事業（チン州）

栄養研修に参加した人 93 名

時期：2020 年 4 月～2022 年 3 月

チン州は、ミャンマー国内の他地域と比較して住民の栄養・健康状態が悪い地域です。頻りに体調を崩し、医療費が家計を圧迫しているケースも少なくありません。そこで、サバウンテー村で栄養研修を実施し、多くの住民が三大栄養素など基礎的な栄養知識を学びました。今後、他 3 地域（ライレンピー、ミンダ）でも実施します。また、栄養価が非常に高い藻である“スピルリナ”の養殖を行い、地域に普及させる活動も同時に進めていく予定です。

(助成：株式会社良品計画)



建設が完了したマジャン準中学校



マジャン準中学校校舎建設事業（チン州）

学習環境が改善された子ども 約 100 人

時期：2020 年 6 月～9 月

マジャン村では、2012 年に小学校を建設し 5 年生までが学んでいました。その後より高い教育を受けることができるよう、準中学校への昇格が認可されました。7 年生までが学べるようになり、学校に通う子どもの人数が大幅に増加しました。しかし、当初建設された木造校舎 1 棟をそのまま使用しているため、狭い空間で学ぶことを余儀なくされていました。新しい校舎を建設し、通学する子どもたちが伸び伸び学ぶことができる環境づくりを行いました。

(個人寄付)



村人総出でレンガなどの資材を建設地へバケツリレーで運ぶ様子



ピエー中学校校舎建設事業（チン州）

学習環境が改善された子ども 約 90 人

時期：2020 年 4 月～2021 年 1 月

ピエー中学校は、1995 年に建設した 2 階建て木造校舎を使用してきました。山岳地域らしい急こう配な傾斜地に立地しているため、老朽化で建物の床下の木材が折れた状態でした。児童数の増加に伴って村が教室を増設してきましたが、建物自体の老朽化が著しいことから、非常に危険な状態になっていました。私たちは、新しい安全な校舎の建設行いつつ、村が自分たちで維持管理していくための基金創出の体制づくりを行いました。

(助成：積水ハウス株式会社)

ミャンマーコーヒーファンづくり

コーヒーアンバサダー 60人

時期：2020年10月～2021年3月



アンバサダー会員限定オンラインイベントに
コーヒー専門家をお迎えしました

2018年にチン州ライレンピー地域にて開始したコーヒー栽培普及プロジェクト。まだ日本でも知名度の低いミャンマーコーヒー応援する「コーヒーアンバサダー制度」を開始しました。アンバサダー会員は寄付を通して支援するだけでなく、私たちと一緒にチン州ライレンピー地域のストーリーやコーヒーを広めていく協力者と位置付けています。会員限定のオンラインイベント等を実施し、ミャンマーに様々なご縁やゆかりのある会員同士の交流を図っています。

(助成：NGO 福岡ネットワーク・真如苑、個人寄付)



国内イベント・ミャンマー雑貨販売

来場および参加者数 400人以上

時期：通年

ミャンマーの文化や魅力、農村地域の課題に取り組む私たちの活動を知ってもらうことを目的として、日本国内でのイベントに出展しています。2020年度は、佐賀県内にて行われた「タイフェスティバル2020」、「SAGAN COFFEE FESTA2020&2021」、「国際交流フェスタ」に出展しました。新型コロナウイルス感染予防を行いつつ、ミャンマーに関心を持ってくださる方々にお会いでき、多くの方のお心に支えられて活動できていることを改めて実感する機会となりました。



神崎涼子

(チン州ミンダ事務所プロジェクトアドミニストレーター)

私は新型コロナウイルス感染拡大のため2020年3月末に日本に一時帰国し、それ以降は自宅でのリモートワークが続いています。遠隔での業務はやりにくさを感じますが、現地スタッフがしっかりと動いてくれるので大きな問題なく事業を進めることができました。クーデターが起き、先行きが見通せない状況となっていますが、これからも現地の人々の協力を得ながら私たちのやるべきことを粛々と進めていければと思っています。



ベンジャミン

(チン州ミンダ事務所フィールドオフィサー)

2020年度はコロナの影響で活動に様々な影響が出ました。特に農業・栄養研修は大人数が集まるため実施できない時期もありましたが、地域住民やカウンターパートと密に連絡を取り、様々な対策をして可能な限り事業を継続してきました。感染者数が減少に転じた頃、今度はクーデターが発生。チン州でも連日デモが行われています。地球市民の会は、農村地域の住民の暮らしのために事業を行っています。今は本当に大変な状況ですが、安全をきちんと確認した上で、地域の人々と協力しながら今後も活動していきたいと思っています。応援よろしくお願いします。



諫山由紀子

(ミャンマー事業国内調整員)

体調を崩してはじめて健康であることの有難みに気づかされるように、コロナやクーデターなどイレギュラー且つ緊急性ある事態を通して、日ごろのスタッフ一人一人や支えてくださる方々のお力を改めて実感する1年間だったと感じています。何事も、一人の力、一つの要素だけで成り立つものはないのだと痛感します。目の前のピンチをいかに乗り越えるかを視界の中心に置きつつも、危機ある状況下でこそ見えてくる平時の自分たちの強みと弱みをしっかり受け取り、これから状況が戻っていく日に向けて研鑽する時ともしていけたらと思っています。